

して國事に參するも、小學教員として小學兒童を相手に無名の一生を終るも、其社稷の光榮に志すの點に於て高下あるなしと。彼はかくて教師の兒童其兩親、市町村の吏員、村の牧師等に對するの關係にまでも論及せり。彼又曰く、諸君の學校にありては一の宗派心一の黨派心もなからん。凡て教員は社會を紛惑する争闘に關すべからず。攝理の信仰、義務の神聖、父長に對する服從、國法の遵奉、君主及び凡ての人の權利の尊敬、これぞ諸君の寸時も其發展に力めざるべからざる所のものなりと。彼は教員の義務の同情すべきを述べて、彼等の得べき慰樂に言及せり。其言楚々人を動かす。曰く、彼等には財産なく、其仕遂ぐる責務に困りて得らるべき名もなく、生涯を單調平凡の仕事に消費せらるゝのみなり。彼等にして其個人的報酬を得るてふ望以外の何等かの希望によりて力と意氣とを得るにあらざるよりは、其境遇や憫むべきなり。されど、彼等は己れの勞力の道德的に重大なりと信ず。是を以て同胞に竭し、名なくとも公共の福利に貢獻する所ありしを思ひて己れの幸福を得ず。これ彼の仕事に對するの酬なり。彼の良心は此酬を與ふるを得、此無名にして勤勞多き境遇以外に逸するとなく、是によりて福利を

受くべき人々よりすらも殆ど其勞を認められずして他人の爲めに粉骨碎身し、而して神よりのみ其報復を得るに於て、彼等の光榮ありと。

十月十一日の内閣は四年の壽命を保ちたる後、其院内に於ける勢力衰へたと閣員の中にチエルとギゾーが衝突したる爲めに瓦解せり。ギゾーは退きたり。一八三八年四月十五日、モレ (Mole) の内閣成れり。こは主義も政見もなくしも荏苒なすなく、唯機をまち、僅に其存在を保たんとせしのみ。斯かれば内閣は間もなく倒れて、一八三九年五月十二日、スール元帥 (Soult) の新内閣組織せられしが、セバステアニ元帥 (Sebastiani) が駐英大使を罷むるに及びて、ギゾーは其補缺を命せられて倫敦に赴任せり。これ恰も東方問題の起りつゝありし時なりき。彼は倫敦にて大使として好評ありき。その文名、その靜平にして威重を有するの氣品、英國の風俗、言語、文學に精通せること、その奉せる新教等は英人をして彼を尊敬せしめ、彼は凡ての社會の人士よりして交際を求められたり。シャトープリアン以來、佛國の大使としてギゾーの如く大なる勢力を揮ひ得しはなかりしとなり。彼と英國外務省との關係は此くの如くにして初めのほとは至つて圓滑なりしが已にし

てシリアの一揆起りてギゾーの地位も亦一變したり。一八四〇年十月二十九日、ギゾーはスールの求によりてスール、ギゾーの聯立内閣を組織し、己れは外相たりき。聯立とは云へ、實權は全くギゾーの手にあり。彼は保守主義を以て爾後八年の間佛國の政界を支配したり。其結果彼は一八四八年二月の革命に遭ひて、惶惶英國に亡命し、爾後全く其意を政治に絶ちて、一八七四年十月十二日を以てノルマンデーなるヴァル・リッシェー(Vol Richey)に死せり。

七 ギゾーの人物を評す

ギゾーは四個の別殊の見地よりして考察せらるべし。一、私人として、二、記者として、三、史家として、四、辯者及び政治家として是なり。彼の私人としての徳は何人も之に疑を挾めるを聞きたることなし。彼の最も激烈なる政敵の一人すら彼を評して云へり、ギゾーは嚴肅清廉なり。彼は其崇高なる道徳に因つて凡ての善良なる人の尊敬を博するの價值ありと。記者としては彼の文は全く特異なり。彼にして一度筆を手にしんか、其調子は常

に確として一直線に其目標とする所に向つて邁進す。偏固の嫌なきにあらず、其形式の亦少しく晦昧の氣味なきにあらざれども、之に包まるゝ思想に至りては明瞭にして輝くが如し。

歴史家としては彼は斯學の上に大功あり。彼は現在より進みて過去を探究することを吾人に教へ、又吾人の今日の標準を以て過去の人物事情を測定することなかるべきを説けり。

辯者としては彼に品位あり、嚴として動かざるの操守あり。其體軀は矮小なりしも其群衆に臨める態度は高くして屈せざりき。彼の言語は其和平なるも猛烈なるも等しく純にして力ありき。聽衆を感激せしむるよりも寧ろ之を説服せしむる方なりき。斯かれば彼の一度演壇に登るや、敵も味方も皆謹聽し、絶えて耳語し、咳し、又は眠る者なかりき。

彼が政治上の見は其變り易きを以て往々にして非難せられたり。彼は以前は政府反對黨なりしに、幾もなくして政府謳歌黨と豹變したり。されど吾人にして各時期に於ける彼の詞、其書きもの、其行爲を品評し來らんか、僅少なる細末を除き

ては彼の政治家としての一般性格は變る所なかりしと斷ずるを得べきなり。ドカーズ内閣の時の彼は、ウイレル内閣の反對黨たる彼なり。吾人は此點に於て尙彼に恩怨なき公平の觀察を加へんと欲す。

攝理は社會の上に永遠の問題を課せり。世には權利及び義務、權力及び自由の二つの相對立する原理の闘争あり。此事や過去に於て存し、現在に於て亦止むことなし。凡ての時代の達人識者は力めて是等の二つの者を調和せんとしたりと雖、如何なる人にも一度此問題に臨みては、絶對に靜冷に絶對に公平なるを得べからざるなり。文學上の眞理は吾人の頭腦の知覺する所にして、何人も之に依りて激動せられざれども、政治上の眞理は之と異りて頭腦と吾人の感情とに作用せり。人の本然の性に依り、其氣分に依り、又其個性に依りて、無意識に之に向つて好惡の情を感ぜざるものはこれあらざるなり。或者の殊に自由を愛し、或者の權力を好む所以なり。或者の大臣となり又他の者の演壇の辯士となる所以なり。或者は權威の本能を眞向に翳し、或者は又獨立の感情に依りて之に抗立す。案するにギゾーはこれ此後者に屬する者なり。彼の智力や高くして進歩的なれど、其性

は何れかと云へが人の上に立たんことを欲する者なり。主治者的なり。彼の考ふる所によれば、今日の佛國は自由主義の前後二回に互るなる大勝利によりて自然に此凱旋を濫用せんとするの癖なきにあらず。權力と自由とは共に社會生活の缺くべからざる要素にてはあれども、今や二つのものは其權衡を失ひて權力弱くなりて、征服せられたり。これギゾーの權力の防衛者として自由と闘ふに至りたりし所以にてありき。若し吾人にして王政復古の頃に於けるギゾーの政論を一讀せんか、吾人は彼の筆致の中に、權力者當局者をば攻撃しながらも、なほ且つ此權力に同情を寄するの情を認め得べきなり。之を要するにギゾーは權力の人なり。政府の人なり。而も同時に最も獨立不羈なる者なり。彼は感情の人たるよりも理智の人なり。群衆の頌詞に有頂天となるが如きものにはあらずして、己れの良心の認承によりて竊に満足する底の者なり。政治家に必要な意志の力と堅忍不拔の氣象とを有し、凡ての不秩序を嫌忌すること蛇蝎の如し。彼は時局にして益墮落せんとするを見れば、挺身して専ら武斷の政治を施す事すらも躊躇せざる者なり。

第四十八章 クーランジュ

一 中學校教師より大學校に

フュステル・ド・クーランジュ (Fustel de Coulanges) は一八三〇年三月十八日を以て佛國巴里に生れたり。長じてシールマーニユ (Charlemagne) 高等中學校に入り、年二十にして即ち一八五〇年に高等師範學校に入れり。有名なるジュール・シモン (Jules Simon) は彼の師なり。その飽くまでも眞理を求めて致々として倦むこととなきの學風はこれ師の賜なるべし。彼は已に史學を以て身を立つるの考にして、居ること三年にして、學業衆を抜くの故を以てアテネ (Athènes) の留學生として希臘に赴き、此所に在ること二年、具に古史研究の勞を積みぬ。

彼は佛國に歸りてアミアン (Amiens) 高等中學校の教授に任せられ、此處にては修辭學を講義せり。されど彼は元と古史を以て其終生の研究題目となす者なれば、修辭學の教師として空しく力をその志望學課の以外に割くを以て便とせず、教授の餘暇を利用して營々として史學の論文をも、しその二論を巴里文科大

學に提出し、學位を請求したりしが、一八五八年四月十日、文科大學の教授は該論文を點檢したる結果、其學才の非凡なるものあるを見て、文學博士の學位を授與することゝなれり。クーランジュは今や一書生にはあらざるなり。一八五九年八月、彼は佛國政府の登用する所となりて、サン・ルイ (Saint-Louis) 高等中學校の史學教授となりぬ。彼が驥足を伸ばすの途は是に拓かれたり。されど限りなきの功名心を有せし彼は、區々一中學の史學教師たるを以て満足するにはあらざりき。一八六〇年、ストラスブルグの文科大學は彼を其史學教授に聘したり。彼は即ち學業に都合よき巴里を去りて、暫く此僻地に退き、其間豫ねて志す所の古史に關する材料を蒐集せんとせり。彼が大學に於ける講義はその簡にして要を盡せるを以て學生の喜ぶ所なりき。

二 不朽の名著「古代市府」

此時に當り英國にてはサー・ヘンリ・メーン「古代法」を著して名聲籍甚たり。クーランジュ乃ち豫ねてその輯集せし材料を纏めて「古代市府」(Cité antique) を著して之を

世に公にせり。これ彼が名著の第一にして其編集叙述別に新機軸を出したれば、非難するの聲もなきにあらざりしかど、學士は争うて之を購讀して洛陽の紙價爲に騰貴するの目覺しき有様を呈しき。彼は此書に於て主として希臘羅馬二人民の公私の行爲は悉く宗教上の行爲に密接の關係を有するを以て、其公私法の源は一に宗教にあるを論じたり。彼には深達の學識あり。其識界も亦廣し。之に加ふるに之を行ふの文章又流麗なり。古代の家制の事之を叙するの簡にして明なるもの恐らくは彼の書の右に出づるはなからん。希臘羅馬の宗教の特色は描かれて殆ど餘蘊なかりき。彼は是に依りて一躍して世界の學者の列に入れり。一八七〇年の末に至り、グーランジは高等師範學校の教授に任せられて巴里に至れり。彼は此にて其得意の古代法を受持ちたるが、其説明の明快にして論理の犀利なる、批評の嚴肅にして假借する所なき爲めに學生の評判宜くして、其講堂は常に聽衆を以て充溢したりきとぞ。彼が任に巴里に轉せし時は、恰も普佛戰役の末期に當り、普軍が勝に乗じて長驅して巴里を包圍しつゝあるの時にして、佛國の運命已に定まり、割地と償金とは講和談判に際して拒み難き敵の要求なり。

とせられつゝありき。普國のアルサス、ロートリンゲン二州の割讓を仄めかすに遇ひて、グーランジ愛國義憤の情抑へ難く、其平常の歴史的智識に依りて、二州が佛國に屬すべきこと當然にしてその證據の青史の上に確たることを論述したる一書を著述したり。これ獨逸の史家モムゼンの歴史上より二州の歸趨を論じたるを反駁せんが爲めにものせられし者にして、此書題して「アルサスは佛領たるか、將た獨領たるか、モムゼン氏に答ふるの書」(L'Alsace est-elle Allemande ou Française? Réponse à M. Mommsen)と云へり。グーランジは又此際別に一書を著して、政府が輿論に反抗して土地を割き、之を一朝にして外國となすの允すべからざるを述べたり。

されど此くの如きは會、彼が時事に就いて平常の蘊蓄を披瀝し、以て聊か國論に資せんとしたりしものゝみ。彼の本領は現代を論ずるよりも寧ろ古代を研究するに在りたれば、彼は戦後に於ては再びもとの書齋場裡の人となりて、その穿鑿の結果をば時々、二世界評論に載せ、古代史に大なる寄與をなしたり。

三 古代佛國法制史

一八七四年、グーランジュは「古代佛國法制史」(Histoire des Institutions Politiques de l'An-cienne France)を著せり。第一編は羅馬帝國、ゲルマン民族、及びメローヴィング王朝時代を叙し、著者は、これは第一世紀より第九世紀に至るガリア(Gallia)の文化を描きたる者に過ぎずと稱するも、其實は蠻族世界の全景、蠻族と羅馬帝國との關係は細大洩らさず、此中に活寫せらる。此書の一度世に出づるや、其説の從來の史家の定説に反對するもの多かりしが、爲め一時史界に波瀾を捲き起さしめたり。されば此書を読む者、敵味方を論せず、グーランジュが史識の博廣なると、其批評の力の銳きと、及び其行文の美なるを讚嘆せざる能はず。書中就中吾人の注目を引くは第二卷と第三卷との記事に在り。第二卷は約二百頁の長きに涉りて、主として羅馬帝國の法制を叙し、第三卷の百二十五頁はゲルマン民族の西方及び南方侵入、並に彼等の文化の羅馬の文物に及ぼせる影響を述べ、ゲルマン民族の政治上、社會上の制度は驚くべきの熟練を以て詳記せられたり。思ふに中古史の初半期の

史實に對してこれ程に明光を與ふる者他にこれなかるべく、又此時代に關する著書にしてグーランジュが此名著程に巧妙なる文にもせられたりしはこれあらざらん。一八七七年、グーランジュは此書の第二版を公にせり。二版は初版よりも増補改竄せられ、又別に附録ありて、是に關する批評に答辯せり。

一八七五年佛國學士院の倫理學政治學部は、彼をしてギゾーの後を承けて學士院の一員たらしめ、同時に年の十二月一日、巴里文科大學は彼をシュプロワの補缺として同大學の講座を擔任せしめたり。彼は益進んで中古史の研究に従事したき希望なりければ、佛國政府は上下兩院に要求して、新に中古史の講座を文科大學に設けしめ、グーランジュを其任に推せり。高等師範學校長ベルソアの逝くに及び、グーランジュは一八八〇年、高等師範學校長に轉じられたれば、彼が企の中古史は終に之を完結すること能はずして終れり。

四 末年の作物

グーランジュ高等師範學校長たるや、又校長の俗務に執掌して成績揚りしが、彼は

此間に於て更に自家専門の研究を廢することなく、以て一八八三年に至れり。同年十一月、彼は終に其職を辭して是より専ら史學の講義を爲し、讀史雜考(Recherches sur Quelques Problemes d'Histoire)なる書を著して其蘊蓄を傾けたり。中には羅馬の(Colon)制、ゲルマン民族の入寇、及び佛國司法制度等に關する研究あり。此外彼が諸雜誌に載せたりし考證や史論を收めたり。其中にて彼が學士會院にてなせし講演の二つをも登錄したるが、これ亦有名なる者なり。其一はゲルマン民族の所有權に關せる問題の研究にして、今一はフラン・ジャマーグの法律に關する問題なりき。

時に佛國翰林院はフランソア第一世以降の勅令を出版するの計畫あり。グーランジ乃ちその適任者を以て、推されてその委員に列せしが、一八八七年には彼は更に擢でられて翰林院の副長となれり。一八八八年、翰林院の倫理學政治部はジャン・レーノアの懸賞問題を審査するに當り、全員一致を以てグーランジが史學の著述殊に其讀史雜考を優等なりとせり。

グーランジが過度の勉強は晩年彼をして甚しく不健康ならしめ、彼は其爲め醫

師の勸告に依りて、一八八七年より翌年にかけてはカンヌに轉地して靜に保養し、斯くて病漸く怠りたれば、一八八八年六月を以て其古代佛國法制史の第二卷を刊行するを得たりしも、間もなく持病再發せり。されど精力絶倫なる彼は苦痛を忍びて此間なほアルカシンの地に土地所有權の起源を論せる一編をものし、之を史學雜誌に寄せ、一八八九年四月一旦巴里に歸り又もや轉地して豫て起草しつゝありし、世襲財産及びメローヴ・グング王朝時代の村有地を校正し、病篤きに至るも其筆を擱かず、九月十二日終に其爲めマッシーに病死したり。享年五十有九。佛國は斯くて其近代の最大史家を失ひたり。

第四十九章 ラヴィッス

エルンスト・ラヴィッス (Ernest Lavisse) は佛國現代第一流の歴史家なり。一八四二年十二月十七日を以てヌーヴ・オン・アン・チエラーシエ (Nouvion-en-Thiérache) に生る。巴里のシャールマーニエ中學校を経て地の高等師範學校に入り、ドクトール・エ・レックトルとなれり。一八六五年より七五年までの間に、ナンシー・ヴェルサイユ及びアンリ四世の三中學校に歴任し、一八七五年、高等師範學校評議員長となり、一八九〇年を以て巴里文科大學の教授となれり。一八九二年、アドミラル・ド・ラ・グラーヴィエール (Admiral de La Gravière) の補缺として佛國學士會員に推選せられぬ。彼は現に佛國有名の評論雜誌「バリ評論」(La Revue de Paris) の主宰者たり。

彼は高等師範學校の出身者にして、現に同校の校長を兼ねつゝあり。教育問題は其興趣を惹きければ、史學上の著書の外に教育に關する刊行書をも有す。左の如し。

「國民教育の問題」(Questions d'Éducation Nationale)

「研究と研究者」(Études et Étudiants)

史籍としては

「普魯西歴史研究」(Études sur l'Histoire de Prusse) (一八七九年)

「フレデリク大王の幼時」(La Jeunesse du Grand Frédéric) (一八九一年)

「即位以前のフレデリク大王」(Le Grand Frédéric avant l'Avènement) (一八九三年)

「獨逸帝國」(L'Allemagne Impériale)

「獨逸の三帝」(Trois Empereurs d'Allemagne)

彼の得意は普魯西の近世史及び獨逸の近世史にあり。以上はこれ其學殖を示すに足るものなり。此外、一般史としては

「歐洲政治史要覽」(Vue Générale de l'Histoire Politique de l'Europe) (一八九〇年)

これ希臘以降今日に至る歐洲の政治的發展をば僅に二百餘頁の小冊子に緊約したるものにて、彼が概括の驚くべき力を示すに足る。フリーマンの「歐洲史概説」と共に斯學に志す者の好参考書として推獎すべし。此外、アルフレド・ラムボー (Alfred Rambaud) との共編に係る「第四世紀乃至現代一般歴史」(Histoire Générale du IVe

Siècle et Nos Jours)あり。こは一八九三年以降著出せられて、十二卷を以て完結せり。獨逸のオンケン的一般史の如くに煩詳ならず、ケムブリジ近世史よりも要領を得、正に一般史の白眉として賞美せらる。

一八九四年佛國史家ヴィクトル・デュルイ(Victor Duruy)の逝くや、翌年彼は大臣ヴィクトル・デュルイ(Un Ministre Victor Duruy)の題號の下に其備忘録を著はせり。彼は現に「佛國史(Histoire de France)の著述を監修しつゝあり。

其三 米國史家

第五十章 バンクロフト

一 失敗牧師

米國の史家にして且つ政治家なるジョージ・バンクロフト(George Bancroft)は一八〇〇年十月三日を以てマサチユセツ州ウースター(Worcester)に生れ、一八九一年一月二十七日、ワシントンに死せり。彼の家族は一六三二年以來米國に在るの舊家にて、彼の父アロン・バンクロフトは、獨立戦争時代の勇士として僧侶として、又記者として傑出せりき。ジョージはエクセター(Exeter)なるフィリプス・アカデミー・ハーヴァード大學に歴學し、尙もハイデルベルヒ、ゲッティンゲン、及び伯林等に遊びて盛其修養を積めり。其ゲッティンゲンに在るや、彼はヘーレン(Heeren)の下にプラトンを學び、アイヒホルン(Eichhorn)に就ては希臘の新約聖書を、ブルーメンバッハ(Blumenbach)には自然科学を學びたり。殊に彼はヘーレンの作を好みて讀みたり。ヘーレンは當時の歴史批評家として最も傑出したる者にして、實に史學の

所謂近世派の祖師にてありき。細密周到なるバンクロフトが史風は糖て師ヘーレンの賜にてありしなり。斯くて彼の歐洲に於ける修學も一と通り卒りたれば、彼は是に於て更に各國の巡歴を思ひ立ち、其漫遊の間に各方の文學、科學、藝術上の名士と交を結ぶを得たりき。其中にはゲーテ、フムボルト、シュライアー、マッハー、ヘーゲル、バイロン、ニエブール、ブンセン、サヴィニー、グーザン、コンスタン及びマンツォニー等なりき。

バンクロフトの父はユニテリアン信徒なりければ、其子をして宣教師たらしめんと欲したりしも、一八二二年、バンクロフトの歐洲より歸りて此業に従事し、初めて説教を試むるに及びて彼は失敗したり。蓋し當時の神學説は信仰に重きを置かずして批評や文學の方に傾きたればなり。是に於てか彼は宣教師を罷めてハーヴァード大學の教師となれり。當時のハーヴァード大學が術學的に古典の學を講せしは彼の甚だ平なる能はざる所なりしが、之と同時に彼の歐洲新仕入れの學風は稍氣取りたりと思しき所なきにあらざりしより學生の氣受け宜しからず、従つて一八二三年に彼が詩や翻譯文や創作を集めて之を出版したりしかど、

何人も之を評判せざりき。されども久しきが間に彼の文體も今は漸く世人の注意する所となり、急がされども休みなき其驚くべき精力、其決然として動かざる山の如きの態度は終に勝利を制せり。彼は一友人と共にマサチューセツ州なるノーサムプトン (Northampton) にラウンド・ヒル學校 (Round Hill School) を建て、其理想とする中等教育を之に適用し、初めて中等教育の程度を高めたり。

二 民主黨議員及び公使

バンクロフトは元とホイッグ黨の家に生れたるものなれども、彼の研究は之をして民主黨に傾かしむるに至れり。彼はラウンド・ヒル學校に教鞭を執りつゝある間に、民主黨議員として州の立法院に選出せられしが、彼が初婚の妻の生家は熱心なるホイッグ黨にてありければ、百方彼を制して終にその議員の職を辭するの止むなきに至らしめたり。一八三一年、バンクロフトは又マサチューセツ州の民主黨よりして國務卿の椅子を提供せられしをも拒めり。彼が彼の黨の會にて勢力あることは斯くの如くにして世に知られければ、大統領ヴァンブーレン (Van Buren) は之を

ボストン港なる收税官に任じ、バンクロフトはオレステス・ブラウソン (Orestes Brownson) や、ナタニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) 等の同僚も此職務に當りて成績を挙げたり。

一八四四年、彼は民主黨よりして州知事の候補者に挙げられしが失敗せり。されど翌年を以てポーク (Pork) の内閣に入りて海軍卿の椅子に倚ることとなり、以て一八四六年に至れり。同年、彼は一箇月間陸軍卿の職務をも實際に於て執りぬ。此内閣に在るの短日月の間に、彼はアナポリスに海軍兵學校を建て、命令を下してカリフォルニアの占領を行ひ、ザカリー・テイラー (Zachary Taylor) を派して墨西哥、テクスアスの境界問題を調査せしめたり。彼は自由の地域を廣むる所以なりとして、テクスアス州併合に關する主張を持續し、その身は民主黨に屬したれども、黒奴廢止の問題に就いては高き道德論を唱道したり。西北境界の問題に就いても彼は又典據たりき。

一八四六年、彼は倫敦駐劄の公使を命せられて赴任し、倫敦に在るの間、マコーレーや、ハラム等の歴史家と交れり。一八四九年、歸國すると共に公生活を退きて暫

らくニューヨークに在りき。一八六六年、合衆國々會の選舉に依りてリンカーンに關する追悼頌徳の演説を試み、翌年、再び外交官に還りて伯林駐劄公使となり、一八七四年まで其地位を保ちたり。是よりワシントン及びニューポート (Newport) に生其餘を送りぬ。彼が晩年に於ける政治上の事業には亦偉大なるものあり。サン・ジャン (San Juan) 仲裁々判事件の如きにありては、彼は其博學と多識とを披瀝して、終に合衆國をして名譽の勝利を得るに至らしめたり。彼が主となりて普魯西其他の北獨逸の諸州と談判したる國籍法に關する條約は、實に初めて國際的に歸化權に承認を與へたるものなり。これよりして歸化の權利は萬國公法上の原則として採用せらるゝに至れり。

三 史學上の著作

バンクロフトは其ラウンド・ヒル學校の事務の頗る繁多なりしにも拘らず、屢々北米評論やウォルシ (Walsh) が「アメリカン・クォーター」に投書せり。彼は又ヘーレンの著「古代希臘の政治」を英譯せり。彼の著作二あり。一は「合衆國史」 (History of the United

States) として一は一八八二年に二冊として刊行されし、合衆國憲法形成の歴史 (History of the Formation of the Constitution of the United States) 是なり。米國史の方は一八三四年に第一冊を出し、一八三七年に第二冊を、其續卷は彼の公務の暇の許す毎に公にせられて、其末卷第十冊の世に問はれしは一八七四年なりき。第一冊の補遺として目すべきは一八三五年の北米評論に載せられたる、革命の古文書歴史 (The Documentary History of the Revolution) なり。此論文は皆に讀書界に新なる研究法を提示したるのみならず、又之に示すに吾人の利用すべき史料の豊富なるを以てするものたりき。彼が研究せる者の性質や其範圍や彼の著作の纏まりしことや、之を貫くなる哲學的精神は如何に世人が彼の著を歡迎するに至りしやを語り得て餘蘊なく、その國內に於ける需要の大なりしは言ふも更なり。書は英國にて翻刻せられ、忽ちにして獨佛丁伊の諸語に翻譯せられたり。著者の伯林より本國に歸らんとするや、王立學士院は彼の爲めに殊に公宴を催して比類なきの名譽を與へ、伯林、ハイデルベルヒ及びミュンヘンの諸大學は一齊に彼を旌表せり。ワシントンにては彼は、其身を終るまで政治家の最も有力なる忠告者たり。又

品格あり修養ある社會の教育者たりき。バンククロフトの著書は是まで出版せられし米國の植民時代及び革命時代を傳記せる者の最良と以て推さるゝ者なり。彼の米國史の十冊中六卷は植民時代を記し、殘る四卷は革命時代を録す。彼の之が著作の爲めに用ひし史料は米國從來の史家の用ひし者よりも遙に多く且つ重要なる者のみなり。彼は是等の材料を研究して其歴史を編むまでに約五十年の勞力を費し、其結果をして終に米國史中に於て古今獨歩の稱あらしむるに至れり。彼の作は出來事の單純なる記録にあらずして、米國の國家社會を構成するに至りし各種の主義思想を哲理的に論究したるものなり。

彼の合衆國史には少くとも二つの特色あり。第一に、其文體は少しく莊重なり。通俗の分子を缺ける所多し。著者の思想は常に禮服を着けつゝある者の如く、従つて樸質と活氣とに乏しきの憾なき能はず。第二に、多少に關らず何れかと云へば議論的の癖あるが如し、章の中には主題の事實を論ずること少く、其學の博識の高きを表明すべきものゝ存せるにも拘らず、説話を無みするものあり。此書を用ひる多くの人々には斯かる談理も著者の意見を知るの料として必要なるべ

けれども、亦讀者の中には之が爲めに作全體が調和的の構造を缺きたるを感ずる者も有るべし。固より斯かる評判は人々に由りて様々なるべく、之あればとて以て此名著の價値を没するに足らず。憲法史の研究者には一八八三年に彼の公にせし作は非常に重要なり。これ別殊の作物なれども又以て合衆國史の續卷を以て目するを得べきものなり。

四 彼の歴史觀

バンクcroftが歴史觀は、彼が一八五四年にニューヨーク史學會の五十年祭になせし演説に於て最も明かなり。彼は哲學を以て集合的民意の基礎なりとす。集合的意志は其活動に因りて倫理的法則を決する所以の材料を披瀝す。吾人の精神界にも亦エネルギー不滅の法則あり。恆久の道理は神聖なるロゴス(Logos)なり。故に歴史なる者は神が實例に依りて此世に仕事をなし給ふものなりと云ふを得べし。歴史の力は恆久にして其全體が有機的たり。個人は此中に在りて自由と責任ともて運動し行爲せり。眞理や道德や正義は發展するものにあらず。唯人間

が集合體として以前よりは善き智識及び行爲の形式を開展するに止まるのみなり。故に社會の狀態は年所と共に次第により善き自由の原則を立て、彼は此意味に於て共和政體を謳歌すること甚し。

彼は又ヘーレンの門生なりしだけに原史料に非常なる重きを置けり。彼の之に關する法則は左の如し。第一に根本史料と歴史的備忘録との區別を立つること、第二に吾人の立脚地を明にし、各自の考にて之を批判することは是なり。彼は斯くて根本史料を蒐集するに其力を致し、英國に住居を構へて苦心し、巨費を投じて米國の往時に關聯する文書各家族の日記、個人の控帳等を集めたり。是等の材料は猶ニューヨーク圖書館の珍重する所たり。彼の是等を取扱ふや、必ずしも一定の標準に於てせずして、記事の乾燥枯淡を避けんが爲めには引用文を簡約し、此點に於ては往々にしてツキデダスの流を汲めり。彼の想像力も亦潤澤なり。其著は全頁悉く鋭き洞察力もて充たさる。彼の概括論も亦靈活なり。彼は其文をもものすに當りて頗る苦心し、往々其章を書き代へ、時には同一の場所を八通りにも認めて其宜しきを擇びなとせり。

其四 獨逸史家

第五十一章 モムゼン

一 伊太利遊學

テオドル・モムゼン(Theodor Mommsen)は一八一七年十一月三十日を以てシュレスウィヒのガルディング(Garding)に生れたり。其一家は祖宗以來此地に農を以て生業とし、北海沿岸に於て少許の土地を有し、之を耕して僅にその口を糊せしものなりしが、彼の祖父の代に至りて漸く之を増加せり。されど其海岸なるがために時々海嘯の襲來を免るゝこと能はずかゝる際には非常に困難したりき。モムゼンの父は牧師にして其家貧しく、其子に傳へたるは唯強壯の身體のみなりき。モムゼンは三人の兄弟中の長兄たり。二弟アウグスト及びティホー(Tycho)何れも學問を以て身を立てたり。彼は家庭に在るの時祖母の教養を受けたり。後年彼の名を天下に顯せるもの、此賢婦の誘導に負ふもの少からざりしと傳ふ。彼はハムブルグに隣れるアルトナ(Altona)の中學に入り、次いで一八三八年四月、キール大學に進

みて法學を修め、ブルヒヤルデーを師と爲せり。彼は同時に諸學者オットー・ヤーインの宅に寓居して各國の語學を究め、即ち語學と法學とを兼修せり。これ彼をして他日古代の學問に就て獨創的事業を爲すに至らしめたる端緒なり。一八三九年、彼は弟ティホー及び其他の友人と共に小き詩集を出版したるが、こは特に云ふべき程のものにはあらざりき。卒業の後暫くアルトナに於て家庭教師たりしが、此間に彼の學殖は當路者の注意を牽きて、一八四三年丁抹政府の囑託する所となりて伊太利に遊びたり。これ彼の一身の爲めにはゲーテやランケの伊太利漫遊の如くに最も重要なものにてありき。モムゼンは此所にて伊太利や獨逸の學士たるボルゲシ(Borghesi)や、ド・ロシ(de Rosi)や、ヘルツェン(Herzen)と共に頻に古代羅馬の文書を研究し、かくて第一に著せる書は、伊太利の古語に關するものなりき。時は凡ての殘存せる羅馬の古文書を一括して、之が完全なる輯集を爲さんとの必要の切に感せられつゝ、ありし頃なりければ、モムゼンのこの語學上の作物は大に世の注意する所となり、當時此業に染手せんとせし、佛國政府はモムゼンに交渉して助力を乞ひしも、故ありて之を果さざりしかば、伯林學士會院は一八四

四年を以て此事業を遂行することゝなれり。蓋し伯林學士會院はこの時を以て恰もボック(Beck)が編集せし希臘古文書の出版を卒へたりければなり。モムゼンは學士會院に推されて其任を託せられ、ザヴ、ニの如き最も之が遂行に努力せしも、學士會院にてこれが費用の大ならんを恐るゝの心配あり、一方にはツムプド(Zumpf)がモムゼンの有力なる敵手として候補を争ふことゝなりたるより、案は未だ公然の決行を見るまでに至らざること數年なりき。されど勉強なるモムゼンは日夜孜孜としてその業は續行し、彼が後年の著たる、羅典古記類聚の基礎となれる備忘録を作り、已に其中に於て古記の研究たる一文一碑と雖、そのまゝに之を採用するが如きことあるべからず、必ず新鮮なる鑑賞を以て之を照さるべからざるを論せり。斯くて彼は其見本としてサムニウム(Samium)に於ける古記を集め、一八五二年にはナポリ王國に存する古記類を刊せり。此等の作は彼をして此方面に於て第一の典據たるを許さしむるに餘ありき。

二 瑞士亡命

一八四七年、モムゼンは伊太利より歸國し、郷里シュレスウ、ヒに在り。レンズブルヒに發行せるシュレスウ、ヒ・ホルスタイン新聞の主筆となれり。時に歐洲一般は民權自由の風潮に動搖せられけるが、彼は自由主義を主張して大に之を其新聞に鼓吹し、革命の爲めに闘へり。二月の革命も一と先鎮靜するに及びて、彼は一八四八年の末を以てライプチヒ大學に聘せられて其羅馬法の員外教授となれり。然るに彼の教授生活は政治上の事故の爲めに一年ならずして中止せらるゝに至りぬ。一八四八年の動亂に、獨逸に急進黨の跋扈せし時には、自由主義を懷抱せるモムゼンも、彼等の共和論に反抗して君主政治の辯護をなしたりしが、其翌年、革命の氣勢も衰へてボイスト(Beist)がクーデターを行ふや、モムゼンは大に之を憤り、同僚の多くの者と共に此所爲に抗議せしかば、彼は忽にして服務規律を無視したりとの廉を以て審問せられ、知名の二學士ハット(Haupt)及ヒヤーン(Jahn)と共に其教授職を褫かれたり。これ一八五〇年の事なりき。

モムゼンは政治上に志を失せし多くの獨逸人の如くに、此に於て瑞士に亡命して其地に留ること約二年なりしが、テューリヒ大學は彼の才を惜み、之を聘して羅

馬法の正教授となせり。此厚意に感激したる彼は羅馬時代は瑞士に關して研究完全せる數個の論文を草して之に酬ひたり。彼は此處にて羅馬史をもつべく銳意せり。これ彼が妻の父なる出版者の暗示に因りしなりしと云ふ。

三 「羅馬史」

モムゼンが多年蒐集したる無數の材料は今唯之を整理し咀嚼して、一の系統として組織すべき許りとなれり。古代羅馬の文物は歴然として彼の心眼に明かとなれり。斯くて著はされたるは其羅馬史 (Römische Geschichte) 三卷にして、こは一八五四年乃至五六年に世に問はれたり。此書の一度出づるや、彼の名は俄然として歐洲に喧傳しぬ。獨逸の大學士にして、學者ならぬ人々に讀ますべき書をもつと云ふことは全く新奇の業なりき。而もモムゼンは此點に於て大に成功せり。彼の驚くべき博識は人の知らぬ根柢を探りて之を摘發し得たり。彼は從來の學士とても之が攻究を力めざるにはあざりし羅馬市の起源を洞破せり。非常なる筆力を以て共和政府の顛覆を誘促せし所以の大政争を描けり。羅馬古史の秘

密は斯くて彼の前には何ものも以て之を被ふこと能はざりき。殊にモムゼンに於て新なりとすべきは其古人に對する性格の抉剔にてありき。從來文人の頌讚して措かざりしキケロ (Cicero) は彼を以てすれば、最も惡き意味に於ての新聞記者に過ぎざりき。ブルタルコス (Pitachos) が英雄として描きたりしポムペーウス (Pompeius) も彼を以てすれば下士官位の小人物のみ。彼はケーザル (Caesar) の人物を現出するに於て最も其力を盡せり。曰く、これ完全無缺の人物なりと。此書の興味は文學書以上なり。獨逸の青年をして獨逸國の要する所のものは、政治の理論や原則にあらずして力なることを感知せしめたるは此書も亦預りて力あり。但し此故を以てモムゼンがナポレオン三世の新ケーザリズム (Caesarism) をも謳歌せんとしたるものなりと云ふはこれ誣言のみ。モムゼン亦之に就いて自ら辯解する所ありき。

「羅馬史」の三卷はケーザルの獨裁政治を以て其終を告げたり。而して續卷は終に刊行せらるゝに至らざりしは惜むべし。一八八四年を以て「帝政時代の羅馬の州」一卷が公にせられたれども、こは彼の「羅馬史」とは全く別種の著述なり。

四 彼の法學上に於ける學績

モムゼンは一八五四年を以て再び歸國してブレスラウ大學の羅馬法教授となり、一八五八年伯林に移りて古代史の教授となりぬ。從來は彼は常に法科大學の教授なりしが、此に至りて史學の専門となりぬ。世人モムゼンの歴史に名高きを以て、彼の羅馬國法に關する研究を忘るゝは非なり。一八五四年伯林の學士會院は彼を羅典古記類聚の編輯長に推し、其編輯に便ならざればとて彼を伯林大學に移せり。彼はこれより四十年以上汲々として専ら此大業に従ひぬ。羅典古記類聚(Corpus Inscriptionum Latinarum)の初卷は一八六一年を以て公にせられ、其續卷十六冊は之につづり、此中モムゼン自身の執筆せるは五冊なり。凡て彼の門下が彼の直接の指導に依りて編纂せし所なり。

彼には此外「羅馬貨幣史」(Geschichte des Römischen Münzwesens)一八六〇年の著あり、一八五八年刊行の「ケーザルまでの羅馬年代記」(Die Römische Chronologie bis auf Caesar)あり、一八六四年乃至一八七八年の「羅馬研究」(Römische Forschungen)二冊あり、一八

七一年乃至七六年の羅馬國法(Römisches Staatsrecht)二冊あり、「獨逸古記類聚」(Monumenta Germaniae Historica)あり、「ケーザルまでの羅馬年代記」は彼がその弟アウグストとの共著に係る。羅馬研究は彼の研究の主要なるものを蒐めたるものにして、其中に收められたる羅馬の貴族、貴族及び平民の權利、議會各種等は殊に注意すべき論文なり。羅馬國法はさきに二卷をもつし、次いで一八八八年を以て其第三卷を公にするに至りしものにして、羅馬の憲法史なり。羅馬の國法に關する作として先づ之を推さざる能はず。

モムゼンの羅馬に關する小論文は實に數百の多きに達し、羅馬法の最古の記録よりしてヨルナンデス(Jornandes)の時代に至るまでの羅馬人の生活及び學問にして彼の開發する所とならざるはなかりき。思ふに一人にして彼の如くに學問の博き方面に涉りしは多く其例を見ざる所なり。彼は大なる古學者なり。法學者なり。政治史家たり。社會史家たり。古代羅馬に關する智識に於て彼の右に出づるはなかりき。彼は細微堅忍の研究慾に加ふるに大膽なる概括力を兼ね有し、又思想觀念の政治的及び社會的生活に及ぼせる結果を追及する能を有せり。彼の叙

事のやゝとすれば明瞭簡單の趣を缺きしは、これ彼に哲學及び法學の素養ありし爲めなるべく、従つて彼は寧ろ出來事を傳するとよりも、出來事と出來事との間の連鎖を論ずるに於て成功したりき。彼の羅馬史は共和政治を以て終を告げたれども、彼の最も永く骨折りしは、何れかと云へば帝政時代の方なり。彼は終に帝政時代に其筆を染めずして了りたれども、後世彼の研究に依りて正に其緒を得たり。

五 彼の政治的活動

モムゼンの活動は學事に於て盡きざりき。彼は其豫て理想せる學者の理想を己れに於て實現せり。彼曰く、何人も學問の何れの科かを其専門となさざるべからず。されど此専門の中に没却せるは不可なり。生涯希臘や羅典の作家を見るの外他なく、又は數學の問題を解くの外に何等をも知ることなき人の目に映じたる世界は如何に憐むべきものなるかを思へと。彼は二十年以上伯林學士會院の幹事として其討論の際には有力なる辯者たり。彼は其過去に興味を有したりしと

同じく現在の時事に就いても意見を有したり。彼は雑誌「普魯西年報」(Preussische Jahrbücher)の創刊者の一人なりき。年報は獨逸の政治雜誌中の最も有力なるものなり。

彼は又醫家ウルヒオールと同じく、一八七二年より一八八二年まで普魯西の國會議員として常に何事によらず強硬の意見を主張したり。熱心なる國民自由黨員として彼は己れの郷國たるシレスウヰを普魯西に併合するにも甘んじて同意を表し、一八七〇年には彼の第二の郷國と云ひても可なる程の伊太利國民に公開書を與へて此戦争に於ける獨逸の位地を辯護したり。されど、彼は餘に主我的なりき。其意見は餘り自主的にして他との調和を許さざりければ、普魯西政府の下に在りながら、尙且つ之に安んずると能はざりき。彼は自由を愛する者なりしにも拘らず自由の結果として生ずるものを憎惡せり。民主々義者たりしにも拘らず常に民衆を輕蔑せり。彼は多くの理想論者の如くに己れの國は勿論他國の缺點過失をも苛酷に批評し、獨逸に於て幾分かシューヴァニズム(Chauvinism)の風を鼓吹せり。彼は最もビスマークの政策に反對したり。彼は自由思想派の一員とし

て選舉の時演説中に政府の政策を評して「眩暈政策」(Politik von Schwindel)と云ひしかば、爲めに一八八〇年起訴せられて法廷に立ちしも、自ら辯護して終に放置せられき。

一八八一年乃至一八八四年、彼はコブルグを代表して獨逸帝國議會の一員たり。國民自由黨より進歩黨に移り、進歩黨の分裂するに及びて自由同志會員となり。彼がビスマルクと相容れざりしは其政策の世界的ならずして獨逸本位なりしと、其資本家を惡みて農民保護の爲めに盡瘁せんとしてたりしとに因りき。彼常に云つて曰く、國民の事業を保護して吾人の力の本源を養ふにあらざるよりは國家の隆昌勃興到底之を期すべからずと。一八八二年一月二十四日、彼の議論に於て痛くビスマルクの非立憲的行動を難するや、ビスマルクは得意の冷罵を以て之に酬いて曰く、吾人を距ると二千年以前の時代の研究に對する熱心は、終に此偉大なる碩學をして現代を見るの明を失ふに至らしめたる、これ敢て吾人の怪むを須ひざる所なりと。ビスマルクは又モムゼンの同志に向つて羅馬時代の穀物税の觀念を以て今日を律すること能はずと云ひたり。之を要するに政治

的活動に於てはモムゼンは成功者にあらざりしと雖、これ蓋し彼が學餘の閑事業に外ならざりしなり。一九〇二年十一月一日、八十六歳の高齡を以てシャーロットンブルヒの自宅に歿しぬ。

六 モムゼンの行狀

モムゼンは科學者ヘルムホルツと最も友とし善く、ヘルムホルツの家はモムゼンの邸より五軒目にて互に隣接せしより二人は時々共に散策せり。彼等は其性質と慣習とに於て酷似したりき。モムゼンは非常なる近眼なりけるが、死の凡そ三年前までは一種の偏見よりして固く眼鏡を用ふるを禁じたりしが、其爲め失敗せしことも度々なりき。

彼は十二人の子を有せしほどの子福者なりければ従つて身體健康壯者を凌ぎたりき。死の數年前より衰弱の爲めに大學の講義を停止したれども、其教授職に在りし間は非常の事の起らざる限り、嘗つて其生活法を變へざりき。彼は四季の何れの時たるを問はず、僅に三時間の睡眠の後、毎朝五時半を以て其床より起き

出でたり。これ殆ど信すべからざるほどなれども事實なり。さればモムセン自らも屢己れの睡眠の状態の死人と選ぶ所なきを白状せり。彼は起き出で、一片の堅パンを食ひ一杯の茶を飲み、其身仕度には頭より足に至るまで、一々夫人の世話を受け、それより午前七時には大學に出かけたり。常に電車通ひなり。無頓着なる彼は時には電車の大學の門前に至りたるをも知らずして通り越すこともありき。彼の講義は活氣に満ち、其説く所に熱するや双眼は爛々たる光を放ち、史上に現れたる人物の美醜共に之を抉出して餘蘊なかりき。

彼は午後二時頃、帰宅して食卓に就き簡單なる食事を認めて、然る後五時まで書齋に閉居し、五時散歩、六時より朝の二時までには休みなく勉強したり。勉強中、彼は夫人の齎せる食物を喫したるが、此間は王公貴人と雖彼の時間を割くを許さざりき。先帝の未だ皇太子妃にておはせし時、モムセンを訪ひて面會を謝絶せられしことありき。書齋内に於ては彼の頑固なる此の如し。彼が八十歳の誕生節の夜、伯林大學四千の學生は炬火の行列をなして彼の門前に至り、之を祝せしに、彼は例に依りて勉強中なりしかば、夫人の周章して出で、之に撥揆せんことを懇願

したるにも拘らず、終に聞入れず、學生をして失望歸還せしめたりき。彼は斯くの如き我意我儘の人物なりしかども、其衆生の輿望は之が爲めに失せざりき。一八八〇年、彼の刻苦して蒐集したる圖書の大部分の、彼が數多の手書と共に火難に遭ふや、彼の友人知己は相謀りて爲めに義捐金を集め、幾くもなくして彼をして其失ふ所を恢復せしめたりき。

彼はその學徳高く其功業の普く認めらるゝ所たりしにも拘らず、一切の稱號を辭退して一八九〇年までは一個の勳章をだに受けざりき。この年彼は多くの勳章受領者の一定の日を期して参内、皇帝皇后兩陛下に拜謁すべき命を受けたり。参内の當日、皇居への道筋ウンテル・デル・リンデン街は貴賓を見んとする見物人もて埋まりて容易に通行すべからざりしが、モムセンは平凡主義の人なれば例によりて自宅前より電車に乗り、無益の時間を費さざらん様にとて一冊の本を携へ、かくてシャローテンブルグより伯林に着せり。到れば街道は警戒嚴にして群衆雜鬧せしが、彼は更に斯かることに頓着せず、警官の守れる線を踏み破りて皇居の方へと進み行けり。かくて彼は終に警官の抑ふる所となりければ、老教授

は怒りて例の罵倒を注ぎかけ、モムセン先生を見知らぬかとして手にする書籍もて警官の面部を打擲せり。彼の此時の服装は古々しき外套を着け、擦り切れたる古帽子を被れることゝて警官も狂人ならんと速断して之を引致し警察の拘留所に打ち込めり。一時間の後皇室の貴賓が拘留所の客となれること知れ渡りて皇室の驚き一方ならず、直ちに御料の馬車を派してモムセンを迎へしめしが老教授は堅きペンチに腰打ち掛けたるまゝ、其身の如何なる場所にあるかをも知らざる如くにペンもて熱心に筆記しつゝありしを發見したりき。彼は斯くの如くにして漸く御料の馬車にて此所より救出されたりきとぞ。

第五十二章 ランケ

一 神學を學ぶ

レオポルド・フォン・ランケ (Leopold von Ranke) は一七九五年十二月二十一日を以てチューリングアなる一小都ウーエ (Wiche) に生れたり。チューリングアは當時サクソニア選挙侯國の一部を成しき。彼の父は辯護士なりしも、彼の先祖は皆系譜の究め得る限りの所にては牧師なりき。この家庭の空氣こそランケをして其身を終るまで深遠なる宗教思想を懐くに至らしめたる所以の者なりき。彼は初め其家の附近なる僧庵内に設けられしドンドルフ (Dondorf) の寄宿學校に入り、是よりシュールブルタ (Schulpforta) に轉じ、更に進んでライプチヒ大學に入れり。彼の小中學及び大學に於ける研究科目は、主として古典學及び宗教學にして、彼は初期に於ては殊に史學を修めたることなく、又史學に何等の嗜好も感せざりき。彼の少壯の時代は革命及び帝國の大騒亂が歐洲を攪亂しつゝありたれども、是等の政治上の事件も彼に向つては時人の最大多數に及ぼせし如き影響を以てする由

なかりしが如し。ランケは終にナポレオンの崇拜に趨歸もせず、一八一三年に於ける獨逸の愛國的反起に動かされもせず、將た爾後獨逸の學生が狂奔するに至りし政治運動にも全く參加せざりき。彼は實に其少時にして彼の一生涯の特色たりし大資質を具備せしと思はる。二十二歳の時、彼はフランクフルト・アン・デル・オーデルなる一學校の教員となりて、普魯西政府に事へたり。彼の郷里は既に普魯西に併合せられぬ。此學校の校長は有名なる希臘學者なるポッポ(Poppo)なりき。ランケは此所にて古典學の教授の外に歴史の教授を囑せられたり。一般に學者は本文即ち根本史料の涉獵を嫌忌するものなれども、彼は兀々として此歩を追うて進みて古代史に關する群籍を讀破し、直ちに中世史に入り、斯くて其一生の理想として人類の歴史上に現れたる神の仕事、即ち一般歴史の研究に従事するの決心を惹起すに至りたり。

二 「羅馬及び獨逸民族史及び南歐の諸公及び人民」

フランクフルトにてランケは其處女作を公にせり。其主題こそは彼の其生涯の

大半を費して研究したりし所なりき。書名を「一四九四年より一五一六年に至る羅馬及び獨逸國民史」(Geschichten der Romanischen und Germanischen Völker von 1494 bis 1516)と云ひ、一八二四年を以て伯林に公刊されぬ。附録として此時代の事を研究せし歴史家達に關する批評あり。如何に傳說的の歴史の深く信用するに足らざるかを示せり。故にランケの此書は、史料の批評的研究の必要を唱へ、且つ之を事例に示すに於て恰もかのニールブルが古代史に於て行ひたりし事を近世史に唱論するものと云ひ得べく、此點に於て正に史界に一時期を劃するの傑作なりと云ふも過言ならざるなり。時の普魯西政府の文部大臣カムプツ(Kampz)は民主運動者を窘窮するの高壓政治家として知られたるが、ランケが此著を讀みて其識に服せしと見え、出版後一週日ならざるにランケに捧ぐるに伯林大學の椅子を以てすべきを約し、斯くて彼は是より三箇月の中に伯林の員外教授に任命せられたり。ランケが當時此講座によりて受くる所の俸給は微々たるものなりしかども、年少の彼が斯くも拔擢せられたるは、普魯西政府が如何に彼の學問上の價値を識認し得たりしかを示すべし。思ふにランケが居常政治圈より超然と

して學事に銳意し、危險なる政論を懷抱するが如き事なかりしは、彼が此任命を受くるに至りし第一の動因なりしならん。彼は以後五十年の間、伯林の人となりて大學と其功名榮達を共にしたり。

彼の伯林にあるや、大學圖書館内にて宗教改革の時代に關係せる古文書の二集を發見したり。文は主として伊太利語なりき。彼は仔細に之を研究したる結果、從來史家の傳ふる所の宗教改革の大史實の大に此古文書の言ふ所と異なるを見、その探索の結果をもつて一八二七年を以て其第二の著、第十六世紀、十七世紀に於ける南歐羅巴の君主及び國民 (Fürsten und Völker von Südeuropa im 16. und 17. Jahrhundert) を公にせり。此書は後の版にて書名を第十六、第十七世紀に於ける土耳其人及び西班牙王國と改めたり。

三 諸外國見學

古文書の研究によりて史學に關する趣味の益、高上したる彼は、今や其彼に向つて開かれし史界の新運命を開拓するに餘念なからんとす。普魯西政府亦彼の篤

學なるに感じてこれに資を給し、彼はよつて一八二七年九月に伊太利に向つて出發したりき。彼は先づ維納に至り、留まること暫時、ゲンツ (Gentz) の友誼により、又宰相メッテルニヒの周旋によりて當時維納に貯藏せられたるベネチアの古文書類を涉獵探索するの業に着手せり。これ實に前人未拓の史實にして、彼は茲に初めて其無盡の價值を發見したり。彼は又多用の時間を割愛してセルビア人ウグステフ・ノヴイチ (Vuk Stephanovich) の提供せる材料によりて、セルビア及びセルビア革命 (Serbien und die Serbische Revolution) を著せり。ステフ・ノヴイチはセルビア革命を目撃せしものなりしなり。これ一八二九年の事なりき。一八二八年、ランケはアルプを越えて爾後三年伊太利に經過したり。彼はメッテルニヒの紹介狀を持参したれば、之によりてヴチカノの一を除きては殆ど伊太利に於ける凡ての重要なる圖書館を檢閲することを得たり。彼をして當時に於ける第一流の歴史家たらしめたる所以の歐洲歴史に關する智識は、彼がベネチア、フェルラ (Ferrara)、羅馬其他の市府に於ける三年の研究の賜なりき。彼は自白して、羅馬にてはその史實を研究するに内方よりせりと云へり。彼は著述としてはドン・カルロス (Don

史學の大家たるの資に於て最早缺くる所なかりき。

四 「羅馬法皇史」普魯西史、佛蘭西史、及び「世界史」

伯林に歸り來りたるランケは、一時其方向を轉じて是までと異なる業務に従事し、一雜誌の記者となれり。これヘルテス(Hertel)が民主自由主義の新聞紙に對して普魯西政府の政策を辯護せんが爲めに發行せし所にして、歴史政治雜誌(Historische Politische Blätter)と稱せしものなり。ランケは元來政治上に於ても彼の専門の史學に於けるが如くに、何等かの抽象的理論を主張せんが爲めに事實を曲ぐるの徒を賤めければ、當時流行の自由主義などは殊に其嫌忌する所なりき。彼は事實のありし儘を披陳して、凡ての黨をして我に趨歸せしめんとしたり。これ彼の記者として成功するに至らざりし所以にして敢て、怪むに足らず。何となれば世人の希望するは政治の科學的議論にあらずして、寧ろ攻撃や駁論や諷刺の筆にありたればなり。ランケの弱點は是に於てかハイネ(Heyne)やビルネ(Börne)等

の自由主義者の攻撃する所となり、獨り自由派の排駁を受けたるのみならずして、彼は尙普魯西の保守黨をも満足せしむること能はず。此くの如きもの四年にして「歴史政治雜誌」も空しく廢刊の已むなきに至りたり。雜誌の三分の二は實にランケの筆に成り、凡ての號を蒐集し、二卷の大冊子の中には獨逸に於て公にせられし政治意見の最良なるものを發見す。

ランケが記者生活は失敗は即ち失敗なりしかども、これ彼の一身にとりては敢て悲むべき事にはあらざりき。彼は爾後其餘生を豫て得意とする方面に費せり。一八三四年より三七年に至る間に彼の「羅馬法皇史」(Geschichte der Römischen Päpste)三卷成りぬ。これ其形式に於ても實質に於ても共に彼が著作中の最大なるものにして、これ實に伊太利にて研究せし結果なり。彼の學名は頓に全歐洲に擧りぬ。オースティン夫人(Mrs. Austin)がものせし此著の英譯は實にマコーレー(Macaulay)をして其有名なる論文を作るに至らしめたるものなりき。

「羅馬法皇史」の未だ完備せられざるに、ランケは早くも其傑作の第二者に着手したり。これ前者の補遺と云ふも可なるべきものにて、彼の作中、獨逸にも最も喧傳

せられたるものなり。題して「宗教改革時代獨逸史」(Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation)と云ふ。一八三九年乃至一八四七年の産物なり。一八三七年、ランケは昇進して伯林の正教授となり、一八四一年に至りては、豫て學藝の士を表彰することを怠らざる普魯西王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世の擢んずる所となりて、普魯西の歴史編纂官に任命せられたり。ランケは此任命に衝動せられて、一八四七年より四八年にかけて「普魯西國史」(Neun Bücher Preussischer Geschichte)九卷を著しぬ。これは後に十二卷に増冊されたるが、題目が普魯西に關するよ、殊に一般讀者の注意を惹きたりき。酷評家なるカーライルは其フレデリク大王を傳著すや、ランケの史風を冷嘲して之をDry as dustと云ひたれども、普魯西王國の創建者等の適當なる價值を表明し、之に近代的研究の爲めの基礎を提供したるのランケなるは否むべからざるの事實なり。一八四八年の革命運動にはランケは毫も與らざりしかも、此後幾何か王に己れの意見書を上り、革命運動に對抗して普魯西國の國性と一致とを保持せざるべからざるを懇懇せり。彼は王に咫尺するの地位を普魯西の王室に於て得るまでに至らざりしかと、彼は王をば彼の著書の

讀者の中にて最も尊敬すべきものなりとし、友侶としては又我に刺戟を與ふるものなりとし、皇后をば友人中の最も信實なるもの、一人なりと言ひき。斯かれば、彼は傳記ものや其他の史籍に於て、往々にして此不幸なる君主を辯護するを怠らざりき。バヴァリア王マキシミリアン二世も亦彼の生平頌美する所にして、彼は王の學問技藝に對する獎勵法に色々の助言を爲したりき。

一八四八年の革命後の靜平時には、ランケは其傑作の第三のものを著出したり。これ一八五二年乃至一八六一年を以て世に出でたる、第十六世紀第十七世紀に於ける佛國史(Französische Geschichte Vornehmlich im 16. und 17. Jahrhundert)なりき。次で「第十七世紀英國史」(Englische Geschichte vornehmlich im 17. Jahrhundert)出でたり。これ一八五九年乃至六七年なり。此著、史界に新なる智識を供せしもの甚だ多し。殊に英國と大陸との關係に就ては、斬新なる説少からず。されど彼が以前の書の如き活氣の稍乏しきの憾あるは、これ亦止むを得ざりき。當時ランケは齡已に七十を超え、其英國公生活の基礎たる議院政治の如き、其精知せざる所にてもありたればなり。彼には是等の大著述の外に小著多し。主として過去三百年に於ける獨逸

び門下の力によりて己れの勢力の各大學に擴延せらるゝに至るを快とせり。彼は其著述には主として力を近代の研究に注ぎたるも、學校の講堂にありては獨逸の中世史を講じて此方面に専門なる記者の一派を作れり。其能力は各方面に於て偉大なりければ、彼の特質の凡てを享受せんは中々難かりき。史實の科學的確實を得るに專一なる所謂批判的研究法は、彼に依りて企及すべからざるの好典例を供給せられ、彼は其宏博の識を傾けて眼光紙背に徹し、原作者の可信性や史料の純正を判定せり。其近世史を著すや、彼は記録局にある事實の目撃者の記事や、純正なる原始的文書の外據るべき所なきを示し、その眞理を追求するに當りては、初めよりして諸種の理論や偏見の迷はず所とならざらんを心せり。多くの史家の滔々として偏れるヘーゲル流の研究法や、自由主義や、ロマンティズムや、宗教的愛國的の偏執は、彼の最も心して避けし所なりき。されど彼の世の常の史家に卓絶せしは其品性なりき。彼曰く、余が目的は單に如何にして事物が實際に起りたるやを發見せるにありと。又曰く、余は第一に歴史家にして、次に耶蘇教徒なりと。凡て史家にして彼程に客觀的ならざるはなからん。彼の大作の凡ての

記事は彼獨得の文體もてものせられたる彼の精神の特質もて色取らる。行にあれば言にあれば、争論の相手としては彼は飽くまでも私心を有せず。其高濤の性は以てソフオグレスやゲーテに比するに足りき。吾人は彼の作物に於て希臘の悲劇に於けるが如く大事件の響を聞く。唯之を實見するを得ざるのみ。彼は世にありふれたる能く知られたる事實を除却するを其主義となし來りたり。これ無學者の間にては彼の著作の通例の史家の其れに比して好評ならざりし所以なりき。されども世界史上の各時期の特色をば簡明に撮記し、文明の動機となれる大なる力を現はすの技倆に至りては彼は常に天下の一品たり。彼の歴史を論ずるや、人民の歴史をもせず、即ち經濟又は社會の方面を除却したれば、彼はコーレーやデーヌの學派に屬せずして寧ろツキヂデスやギボンの流を汲むものと云ふべかりき。彼は殊に世界の支配者統率者を對象として歴史を編纂し、其研究の範圍をば専ら國家の歴史即ち政治史にのみ限りたり。英國の史家シーレーは彼の大なる門下の一人なりき。

第五十三章 トライチケ

一 政治運動家としてのトライチケ

ハインリヒ・フォン・トライチケ(Heinrich von Treitschke)は一八三四年九月十五日を以てドレスデンに生れたり。サクソニア陸軍の一士官の子なりき。父は後に出世してキューニヒスタイン(Königsstein)の知事となり、又ドレスデンの軍務知事となれり。トライチケは耳聾して公職に就くこと能はざりき。彼はライプチヒ及びボンに學び、ボンにては有名なる自由主義者ダールマン(Dahlmann)の門に就けり。大學を卒ふるに及びて、彼はライプチヒ大學の私教授となり、歴史及び政治學を講じ、其雄辯を以て忽ちにして學生間に大なる勢力を得たり。されど彼は講堂に於て其得意の政治論を試み、時事問題を批評したりし爲め、サクソニア政府の忌む所となりて、教授に昇進すること能はざりき。彼は當時強硬なる自由主義者として全獨逸を統一して議院的政治を施し、凡ての小國を盡く抹殺し終らんと主張したり。一八六三年ブライブルグ大學の教授として聘せられぬ。

一八六六年、普墺戦争の破裂するや、トライチケは大に普魯西に同情を寄せて、自ら伯林に至り、サクソニアの民籍より轉じて普魯西の臣民となり、普魯西年報雜誌(Preussische Jahrbücher)の記者に任せられ、此時よりして普魯西の政策の有力なる辯護者となれり。傍若無人なる彼は斯くの如くにして終にはハンノフル及びサクソニアニケ國併合を主張し、酷しくサクソニアの王室を攻撃したれば、該王室よりして殊遇を被りたる彼の父は、大に彼の所爲を怒り、父子の疏隔を招くに至れり。トライチケの普魯西に對するの熱狂は彼の如くに自己の任意に普魯西人となれるものにあらず、大勢止むを得ずして之に投合せしものに向つて公平なる能はず、彼をして一八七〇年には更にバヴアリアを攻撃するに至らしめき。彼はキール及びハイデルベルヒの兩大學に教授たりし後、一八七四年を以て伯林の教授となれり。これより先、彼は一八七一年に獨逸帝國議會の一員たり。爾來二十五年の間、伯林の名物男となれり。ジューベル(Sybel)教授の逝くや、彼は之に繼ぎて「史學雜誌」(Historische Zeitschrift)の記者たり。彼は斯くて、入つては大學の教授たり。出で、は議會の一代議士たり。此學理實際の兩方面に於ける彼の聲名は、彼

をして學生の間に大なる人望を博せしめ、彼の熱烈なる愛國心は聽講者をして感動せしめたり。自由主義者たりし彼は、今や一轉してホーヘンツォレルン家の主なる謳歌者となり、彼は此立場に在りて最も力を盡くして青年の心裡に甚大の影響を及ぼし、獨逸の勃興發展に害なりと認めし凡ての説や政黨をば猛烈に攻撃して、學生をして必ず彼の持説に歸依するに至らざれば止まざらしめたり。これ彼が社會黨波蘭土人及び加持力教徒征伐の政府の立法施設に向つて、常に其助力を吝まざりし所以にして、帝國の感情的統一に急なる彼は、尙進んで一八七八年を以て始まれる獨逸の猶太人征伐をまでも認めて憚らざるに至りき。思ふに此猶太人逐逐は頗る世間の非難の的となりしものにして、當時の名士にして、之を允許せしは甚だ少かりしなり。彼は又帝國の植民的膨脹を主張し、斯くて自ら英國の敵手たりき。思ふに第十九世紀末年に獨逸に盛なりし英國排斥の感情は、彼の鼓吹に依るもの少からざりしなり。帝國議會にては、彼は素と國民自由黨の一議員たりしも、一八七九年に至りて、初めてビスマルクの新商業政策を採用し、晩年には溫和保守黨に加はれり。されど蠱疾の爲めに議場の討論に華々しき

役目を演ずること能はざりき。一八九六年四月二十八日伯林に死せり。

二 史家としてのトライチケ 其獨逸史

歴史家としてはトライチケは頗る高き地位を占む。彼の史學上の作は全く過ぐる二世紀の間のみを其題目となす。彼は政治家として史學を修めしものにして、穿鑿博涉等の事は素と其嗜好する所にあらざれば、主として今現に大なる政治問題の働きつゝあるなる時代や、其特質を研究するにのみ専なりき。主題は自ら博きに渉るを得ざりしなり。彼は愛國的歴史家なりき。其足は嘗つて普魯西の外に遠く出でたることなし。其傑作は言ふまでもなく、十九世紀獨逸史 (Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert) にあり。其初冊は一八七九年を以て直に公にせられ、爾來十六年の間に續卷四冊は出でたれども、彼の死せし爲めに、記載の史實は一八四七年以後に及ぶこと能はざりき。思ふに此名著も亦將來とも斷片として止まるべく、彼が種々特殊の見解を持したるべく思はれたる一八四八年の革命運動の記事をさへ完結するに至らざりしは痛惜するに餘あり。此著は其全編を通じて

非常なる苦心の跡を示す。典據とすべき資料を用ふるには頗る細心なり。彼が此研究したる時代の事に就ては後世史家と雖多く加ふること能はざるべし。強ひて其缺點を挙げなんには餘に議論多く、其次序の如きも編制の體を得ずして難然たり。されど其文體説話の靈妙なる力及び性格描寫の特技は、獨逸の歴史上にありて最も面白からざる時代をも、尙且つ活氣滿幅たるものたらしむ。彼は黨人として其意見には随分と極端なるものなきにあらず、趣味一方に偏するの失なきにあらざりしにも拘らず、此作は確に文學上の偉能を著しく發揮し得たるものとして不朽の名をなすに足るなり。

トライチケが獨逸に對するの愛國心は、其尙二十歳の頃、一八五三年の十二月十日にもせし左の詩賦にて明かなり。歌は題して「聯邦の歌」(Bundeslied)と云ふ。

Sei uns gegrüßt, du froher Tag,

Im trauten Bundeskreise!

Es singt mit raschem Herzensschlag

Dir jeder Mund zum Preise.

Ein Lied des Mutes soll es sein,
Kein schmeicheln des Gekose
Im Geisteskampf nur kann gedeihn
Das Wahre und das Grosze.

Wohl viele sind, die voller Neid
Den teuren Bund befenden.
Wir zagen nicht, im offenen Streit
Dem Bösen nah zu treten.

Ein Lied der Freiheit solles sein,
Ein Lied der Burschentreue,
Dass heute sich beim goldenen Wein
Der alte Schwur erneue.

Wir schwörens neu mit Herz und Hand:
 Kein Drehen soll, kein Gleiszen
 Die Glut für Recht und Vaterland
 Aus unsern Herzen reizen,
 Ein Lied der Liebe soll es sein,
 Aus voller Brust gesungen
 Euch allen, die der Bundes reihn
 Mit seiner Lust umschlungen.
 Wie treu jetzt Aug in Auge schaut
 Bei frohom Becherklange,
 So stehn wir zu einander traut
 Auch in des Lebens Drange.

Der Freiheit Treu, den Freunden Treu
 Und Mut im rechten Streiten:
 So bleibt der Jugend Kraft uns neu
 Bis in die fernsten Zeiten!
 Ob dann mit argem Spöttermund
 Die matte Welt uns höhne!
 Fest stehn Wir zu dem alten Bund,
 Frankonias brave Söhne!

三 爾餘の著作

トライチケには傳記や歴史論文、其他時事問題に關する多くの論文記事あり。時事問題に關する彼の筆の中には、政治思想に對する重要な觀察もあれども、其敵を對手の議論の中には感服し難きものも亦尠からず。此等の論文中の重要な

るものは「歴史及び政治論集」(Historische und Politische Aufsätze)の各の下に一八九六年、ライプツヒヒに刊行せられたり。全部四冊あり。彼の争論的論文より精選したるものは「獨逸の争論の十年間」(Zehn Jahre deutscher Kämpfe)と題して出されしが、一八九六年に其補冊も公刊せられたり。「新卷獨逸の争論」(Deutsche Kämpfe, Neue Folge)と題せり。彼の死後、其政治上の論文は「政治論」(Politik)の書名の下に、これ亦發行せられたり。彼の書の中には此外其一八七五年に世に問はれし「社會主義とその保護者」(Der Sozialismus und Seine Gönner)あり。一八五六年に出でたる「祖國詩集」(Vaterländische Gedichte)一卷あり。翌年其續巻出でたり。彼の著作の中には英文に譯せられしは一八七〇年の戦争に關する二小冊子のみなりき。一は「吾人の佛國に要求すべきものは如何にして、他は「獨逸聯邦の試験なり。

第五十四章 ラムプレヒト

一 學校生活

今日の獨逸史學界に在りてはライプツヒヒ大學の史學教授カール・ラムプレヒト(Karl Lamprecht)を以て實に最も顯著なる人物の一人となす。否彼を以て世界の史學界に於ける最も卓偉の學士の一人と稱するも亦過言にあらざるなり。これ尙に彼がかの有名なる史籍の創著者たるに因るのみにあらずして、亦實に從來の史風に對し史學の上に更に一新方面を開拓し、之を指導したるの偉功に因らずんばあらず。彼は所謂文明史的研究法の第一の代表者なり。人間の精神生活の史的發展の基礎をば其多方面の表れの中に探り、此根柢よりして凡ての史的過程を理解せんとする者なり。

ラムプレヒトは獨逸の精神生活の發展の上に大なる記憶を有する上サクソニアなるチューリングアに出でたり。彼は一八五六年二月二十五日を以て、昔のサクソニア選挙侯國の一市なるエッセン(Essen)に生れたり。土地の牧師の子なりき。

れば彼の精神上の故郷は實に獨逸の新教會にてありき。彼は中學校の教育をサクスニアの文化に關係甚だ深き二つの場所に於て享受したり。一はウィッテンベルヒ(Wittenberg)にして、此所にては彼嘗つては、ルーテルの書を刊行せし出版者として知られたるハールフト(H. Lufft)の持物なりし宗教改革時代の古き一家に住込み、次には古き僧庵の所在地として知られたるポルタ(Pforta)に住みたりき。ポルタはザール河に沿ひて風景に富み、此所には其名も高き封建の城壁あり。又美術史上に著名なるナウムブルグ(Naumburg)の伽藍あり。大學の研究に於てはラムプレヒトは頗る多くの方面を涉獵したり。斯くの如きは彼の時代の少壯の史學士には稀有のことにてありき。彼は第一にゲッティンゲンに赴きて批評的史料研究法もて一家を成したるゲーワイツ(G. Waits)に就けり。ワイツは又獨逸の憲法史を以て知られたる人なり。ライプチヒにては彼は政治史家にして、獨逸に於て初めて史學の研究室を創めたるカーフ・ノールデン(K. von Noorden)の講義を聽きたるが、同時に歴史經濟學派の創立者ウィルヘルム・ロッシェルに近昵し、又美術家及び美術上の作品の史的意義を極むるに得意なりしアー・スプリンガー(A. Springer)とも親めり。ミンヘンに至りては彼は尙資料の研究よりして美術史を學び、是に依りて大に其文明史的の考案法を長養せり。各方面に涉りて修養の勞を積みたる彼は、一八七八年を以てドクトル論文をものして卒業したり。論文は題して「中古に於ける佛國の經濟生活」と云ふ。當時の史學界にありては蓋し珍奇の研究に屬しき。此論文は後に佛文の譯書としても行はれき。

二 教授生活

學校生活を卒へたるラムプレヒトは第一に教師の實際生活に入り、キール市なるフリードリッヒ・ウィルヘルム・ギムナジウムの教師となれり。時に彼の上に校長たりしは性格の人として有名なりしオー・イーゲル(O. Jäger)なりき。彼は斯くて文明史上の各種の記念物の至つて豊富なる西方獨逸に至れり。これ彼の後に云ふ所に依れば、實に其最も仕合なる過去の地にてありき。ラムプレヒトをして此地に於て其學問上の事業の緒を開くを得しめたるは、實にグスターフ・フォン・メヴィセン(Gustav von Mevissen)その人なりき。メヴィセンはライン地方に於ける企業

學校生活を卒へたるラムプレヒトは第一に教師の實際生活に入り、キール市なるフリードリッヒ・ウィルヘルム・ギムナジウムの教師となれり。時に彼の上に校長たりしは性格の人として有名なりしオー・イーゲル(O. Jäger)なりき。彼は斯くて文明史上の各種の記念物の至つて豊富なる西方獨逸に至れり。これ彼の後に云ふ所に依れば、實に其最も仕合なる過去の地にてありき。ラムプレヒトをして此地に於て其學問上の事業の緒を開くを得しめたるは、實にグスターフ・フォン・メヴィセン(Gustav von Mevissen)その人なりき。メヴィセンはライン地方に於ける企業

家の錚々たる者なり。豫て精神上史學上の研究に熱中せし溫和自由主義者なりき。ラムブレヒトは是に依りて一八八〇年にはボン大學の私教授となり、越えて五年、一八八五年には其員外教授に、一八九〇年には進んでマールブルグ大學の正教授となり、翌年を以てライプチヒの教授に聘せられて以て今日に至れり。彼は斯くて其故郷たる上サクソニアの開化せる地方に歸還せり。今や其齡中老を越え、學問上幾度か主義主張を闢はしたれども、其論唱せる高等教育に文化史を挿入するの一條は宿望を達し、文化史一般史の研究所も幸にして彼の考通りに新設せられたれば、彼は思ふに其身を終ふる迄ライプチヒに留まるなるべし。

三 中古に於ける獨逸の經濟生活

ラムブレヒトは夙に人類社會の進歩の間に文化の各方面の現象が如何に發展せるやを比較研究せんとを思ひ立てり。彼は此研究法を獨逸に適用し、獨逸史殊にオットー帝時代に於ける教會史に關し史料の系統的講義をなせる際に、今日と大に異なる當時の種々の精神上の傾向の存するを物色し得たり。美術や詩や習

慣や將た物質的文明の如きに至る迄、之を研究するに及びて同時代に於ける一般の心理状態は髣髴として明なりき。彼は斯くの如くにして次第に經驗的討究に向つて進入し、一時代の凡ての生活現象の根本となるなる心理的眞髓を決する各文化の時期を區別し、一時代より次の時代へと進むに従つて其強度を増する精神生活を示さんとせり。彼は心理的發展の有様を尙深く究めん爲めの豫備として、往時に於ける想像の活動、殊に彫刻術の如何を明にせんとし、斯くして一八八二年を以て第八世紀より第十三世紀に至る裝飾 (Initialornamentik vom 8. bis 13. Jahrhundert) を著述せり。彼は何よりも第一にモーゼル河流域に在るなる資材に依りて物質的文明の發展の様を研究し、是に依りて農業の狀態を歴史的統計的に調査したり。其研究法の如きは當時の獨逸に在りては全く嶄新なる方法なりき。一八八六年刊行の「中古に於ける獨逸の經濟生活」 (Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelalter) は其產物なり。これ實に獨逸特有の農制を披瀝したる材料豊富の著作にして、彼を謳歌するの史家はより多し。

四 「獨逸史」

ライン地方に關する多くの小著を營める傍に、今や自己獨得の史學的世界觀の理想を體認し得たりとせるラムブレヒトは、今度は獨逸の國民的歴史の廣汎なる著作に従事せり。勿論この際の彼の念は多くの各方面専門家の仕事を集めたる者としてならず、其統一的綜合的基礎觀念よりして唯一人の手にて之を編み出さんとするにありき。斯くて二十年以上の長星霜を閱して出來上りたるは、其「獨逸史」(Deutsche Geschichte)にあり。一八九二年その一卷を公にしてより、今日にては將に全部完結の運びに向ひつゝあり。全體は十二卷の筈なりしも、之に最近の事情を叙したる補遺三卷を加へて十五卷の大冊子となす。

ラムブレヒトが體系には非難随分と尠からざりき。或者は彼が細故を省略せるを攻撃し、或者は彼の綜合觀を打破るなる根本的矛盾を指摘したり。是に於てか獨逸の史界には目覺ましき爭論起れり。ラムブレヒトは元來戰闘を好む者なり。自己が終極の勝利を得べきを飽くまでも信じて疑はざる者なり。彼は認識論的

問題を考ふるを喜びて其の論敵と史學研究に付て争へり。斯くて所謂史學上の争、(Geschichtswissenschaftliche Streit)の起りたるは一八九六年にあり。彼は續々多くの著を出して持論を唱道し、その説に説明を加へつゝ尙之を基礎として其思想を擴延したり。史學に於ける新舊の方面 (Alte und neue Richtungen in der Geschichtswissenschaft) に於ては彼はランチェ一派の史風が史上に現はれたる特殊の意志を究むるに癖して、史實の由つて起る所以の根元を闡明すること、足らざるを慨し、自己の立脚地の寧ろ重きを群衆の精神に置き、一二天才を偏重するランケ派の史風と異なるを説き、且つランチが神祕論觀念論を駁撃したり。此外彼が一八九七年に發行せし「オンケン、デルブリック、レンツ諸君子に對する二駁論」(Zwei Streitschriften den Herren H. Oncken, H. Delbrück, M. Lenz zugewendet von K. Lamprecht) あり。文明史とは何ぞや (Was ist Kulturgeschichte) あり。史上に於ける個人觀念及び社會心理的勢力 (Individualität, Idee und Sozialpsychische Kraft in der Geschichte) あり。それどもラムブレヒトの意見の最も圓熟しその最も明表せられたるは、もと敵論を攻撃するの考よりもせられたるにあらざりし米國に於ける彼の講演「近世史學」

(Moderne Geschichtswissenschaft) にあり。これ一九〇四年を以て刊行せられたり。彼は其一代の大作たる獨逸史の著述を了へんとしつゝ、其一般歴史上の問題は斯くて正に解決の途に就かんとす。彼は是に依りて其一生の大業に掉尾の完結を告げしめんが爲めに、世界史の發展をも、又獨逸史の編纂に用ひたりし原則を應用して、一般史研究法を編み、殊に之を東部亞細亞の諸文化民族に充てて原始的の想像力の働きを觀察し、此民族の本然の性を成すなる差違點の發展徑路をばゲルマン民族に就て爲せし如くに追跡せんとす。

五 彼の史家としての地位

此の如くにラムブレヒトは、歴史的發展の中に於て綜合を得概括を得んことに努力せしと雖、彼は歴史的の心理學者にはあらず。彼は歴史哲學者と云はんよりも、寧ろ精確歴史的心理學即ち心理發展の研究に一新路を開拓せしものなりと云ふべし。彼は歸納的經驗的討究の手段方法を以て史學上の材料を取扱ひ、觀察法即ち個人を以て歴史經過の動力なりとするの見到反對して、所謂大人豪傑

の歴史事實の發作に重要な役目を演ずるものなりとせるを拒み、社會の心理上の要素の最も重大なるを示せり。超絶的の効果は彼の史學上の觀察よりして排除する所、彼は歴史的發展説を以て其立脚の地となす、假令自由と必然とが共に人間の行爲を支配すてふ事實にして經驗的に確立せらるゝとすとも、科學としての史學は歴史の過程をば正規の因果の連続として説示するを其命題となさざるべからず。勿論此際に吾人の求むるは機械的一偏の者ならず、心理的因果律の概念ならざるべからず。ラムブレヒトが史觀の骨子は互に相融會し冥合する文化の各時代を臚列すること、に在りき。彼は之を稱して象徴主義(Symbolismus)、典型主義(Typismus)、慣習主義(Konventionalismus)、個人主義、及び主觀主義の文化時代と云へり。

此の如くに廣汎なる科學上の目標を追うて進みつゝ、ラムブレヒトは常に無數の史料を解明するの點に於て其驚くべき能力を發したるに止まらず、亦編制の大業に於ても其力を顯したり。彼は好んで學問上の色々の建設物に與れり。嘗て史學會の創立に參與したりし彼は、サクソニア王國の歴史委員となれり。一九

○九年を以て成立を告げたるライプチヒ大學の「王立サクソニア文化史及び一般史學院」(Königlich Sächsische Institut für Kultur und Universalgeschichte)は彼の發起設立する所たり。彼は非常なる熱心と驚くべき成功とを以て史學院の蒐集せる文書や古美術品を涉獵し、之を己れの用に供しつゝあり。

ラムブレヒトは徐々に其研究の道に向つて進行するの人にあらず。彼は性急に於て其裏に潜める熱火は必ずや之が炎々たる焰を迸發するに至らずんば止まず。彼は其望みたる地歩を占むれば、直ちに新なるを追及して聊も怯まず。其一代の大業は已に世人の認識する所となれり。彼は一身の功名富貴には存外に淡泊なり。常に樂天的に其談話は爽快なり。講壇に立ちては彼は情操的の言辭を避け、只管に論理の鏡、其大なる洞察が其靈活なる綜合力を以て人を動かさんとす。學生を指導することは彼の特に喜ぶ所、彼に近親する者は皆意志の力絶倫なる彼に於て、又其心の眞に優しく、善良なるを知らざるはなし。

其五 匈牙利史家

第五十五章 ライヒ

一 小傳

ドクトル・エミール・ライヒ(Dr. Emil Reich)は匈牙利の人なり。一八五四年三月二十四日を以て同國エペルユス(Eperjes)に生れたり。父をルイス・ライヒと云ふ。郷市スペルユス、カッサ(Kassa)プラーグ、グダベスト等に修學して維納大學に大學生活を卒へ、そのドクトル・ユーリス・ウニフェルシーとなれり。彼は三十歳の頃までは殆ど圖書館の中に埋れてのみ其學問を修めたりしが、歴史を眞に理解し其事相を闡發せんが爲めには圖書のみに據るの不充分なるを覺るに及びて、世間の實際を見學せん爲め外國を旅行するに決し、合衆國にあること五年、佛國に四年を費し、而して時に間斷なきにはあらずしかど、英國に留ること前後十有三年、其間屢、倫敦大學ケムブリッジ、オクスフォード大學等にて講演を試み、其卓抜の史眼を以て、世人をして史界亦ライヒあることを知るに至らしめたり。彼は故ヴイクトリア女

皇在世の初、英國政府の囑託によりてヴェネツィア境界問題に就て、英國側の議論を證明する爲め史實の取調に従事したりき。大學の専門教授にあらず、渺たる一記者にして而も其燃犀の史眼を以て史學界に一旗幟を樹て、其一度書を公にするや、人をして争うて之を繙讀して識見の明透批評の銳利を喜ばしめたる彼や、亦一の才人なりと云ふべし。一九一〇年十二月十一日、惜むべし、五十六歳の壯齡を以て歿りぬ。彼一八九三年、巴里の婦人セリヌ・ラブル (Céline Labulle) を娶りて一女を生めり。

彼著作尠からず。

「文明史」(History of Civilization)

「希臘羅馬の制度」(Graeco-Roman Institutions) オクスフォード大學講演

「匈牙利文學」(Hungarian Literature)

「英國歴史地圖」(Atlas of English History)

「地理學」(Handbook of Geography Chiefly Physiographic and Mathematical)

「近世歐羅巴の基礎」(Foundations of Modern Europe.)

「中世史及び近世史古文書選」(Select Documents Illustrating Mediaeval and Modern History)

「古代地圖」(Atlas Antiquus)

「近世歴史地圖」(Atlas of Modern History)

「證據の根本原理」(The Fundamental Principles of Evidence)

「帝國主義」(Imperialism.)

「國民功業論」(Success among nations)

「歴史上に於ける外國人」(The Foreigner in History)

「大哲學者の學說」(Principal Chapters from the Great Philosophers)

「聖書高等批評の失敗」(The Failure of the Higher Criticism of the Bible)

「近世生活の端緒としてのプラト」(Plato, as an Introduction to Modern Life.)

「成功論」(Success in Life.)

「西洋國民一般歴史」(General History of Western Nations) (其第一編古代史三卷)

「神と夜」(Nights with the Gods) 一九〇九年

文明協會はライヒの著の中國民功業論及び近世歐羅巴の基礎の二編を譯刊し

たれば、讀者は之を繙きて著者が事相を見るの深刻なるものあるを味はれたるべし。今茲には彼の外人論を紹介して、以て彼の史風の如何なるものなりやを示さんと欲す。

二 ライヒの「歴史上に於ける外國人」

ライヒは此書に於て、人は本國人たる身分を棄て、外國人となる事に依りて初めて其本國人としては發揮することを得ざりし諸能力を顯發することを得るものなりと云へり。以爲らく新に外國人となりしものは、其新なる外國の氣候や風景や、其住民や、其土地に特殊なる傳説に依りて精神の活動の有様を異にし、地に定住するものには普通なりしことにも、尙且つ強き印象を受くるに至るものなり。歴史上に偉勳を奏せし外國人の心理作用は是に由來するものなりと。これ一見極めて平凡の眞理なるが如しと雖、ライヒは之を歴史上の事實に適用し、特色の現象の解明に利便したり。

彼は愛蘭人が其本國以外に於ては到る處に成功しつゝあること、英國の傑出せ

る政治家、學者等に蘇格蘭出身者の多きこと、如何なる米國の大敵と雖、米國の成功を否認すること能はざるが、而も斯くの如き米國の成功の大部分が外國人に歸せられざるべからざること、猶太人が物質的には經濟上の致富に成功し、精神的には學者として成功せる其原由の、彼等の外國人たるの地位に存すること、英國及び米國に於ける自由の發達すること、兩國が又外國人に對しては比較的豊富なる機會を與ふると、此所にては人は容易に外國人の如くに各の地位を轉想するを得ること等、其他多くの歴史上の事實をば一に此外國人説によりて解明せり。彼は又「比較的の外國人」と云へる詞を用ひたり。人は本國人たる身分をば正式に放棄し終らざれども、本國に居ながら尙且つ外國人的に其身を處することに依りて比較的の外國人たる身分の心理状態に達するを得べし。即ち言を換へて之を云へば比較的の外國人とは一代の毀譽を顧みずして、己れの思考せんとすることを思考し、己れの行はんと欲することを行ふの徒にあり。斯かる輩は本國に住居すと雖、其身分は外國人なり、世界史上の大事事件は殆ど此所謂廣義狹義の外國人の手に依りて遂げられざるはなかりしと云ひて其不可なるを見ず。

近世泰西英傑傳 第四卷終

明治四十四年十月一日印刷
明治四十四年十月七日發行

著作權
所有

發行所

近世泰西英傑傳第四卷
非賣品

(第四十七回配布分)

編輯兼發行者

大日本文明協會

右代表者

磯部保次

印刷者

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

印刷所

武廣和雄

東京市京橋區宗十郎町十五番地

東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

大日本文明協會

電話新橋

一七八〇
一七八八
一七八二

振替貯金口座

一三七〇〇

工卜X19

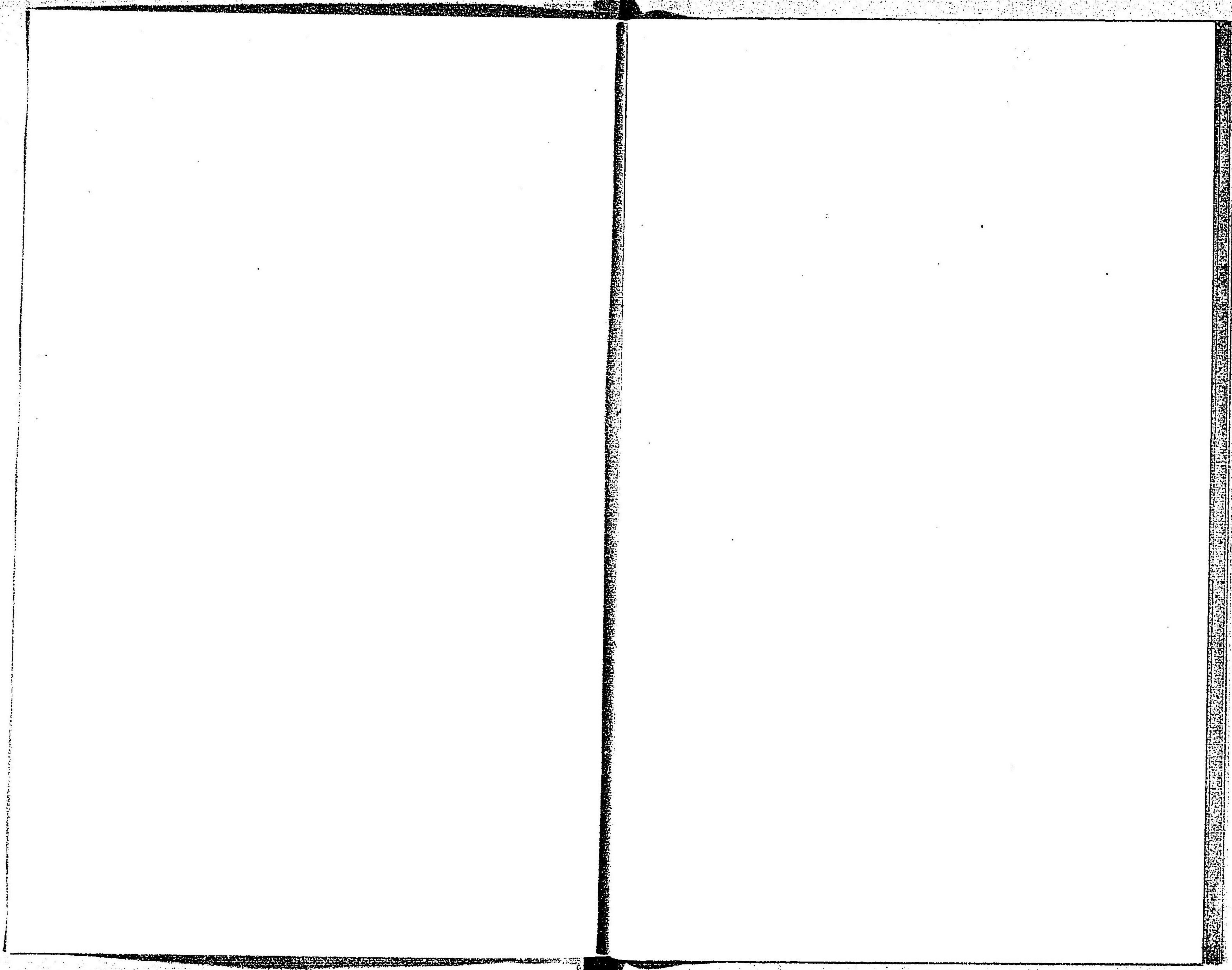
大日本文明協會役員

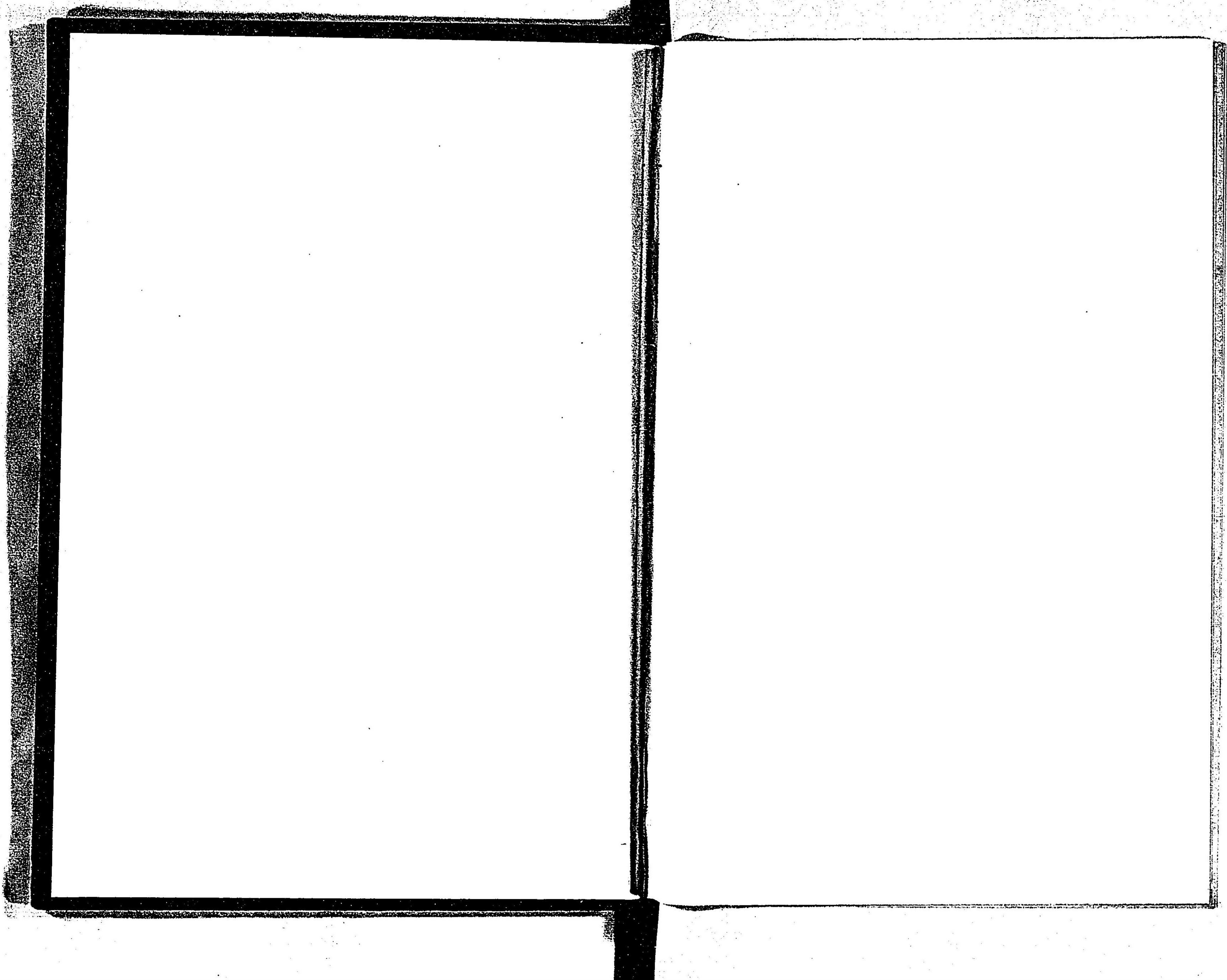
本會會長 伯爵 大隈重信

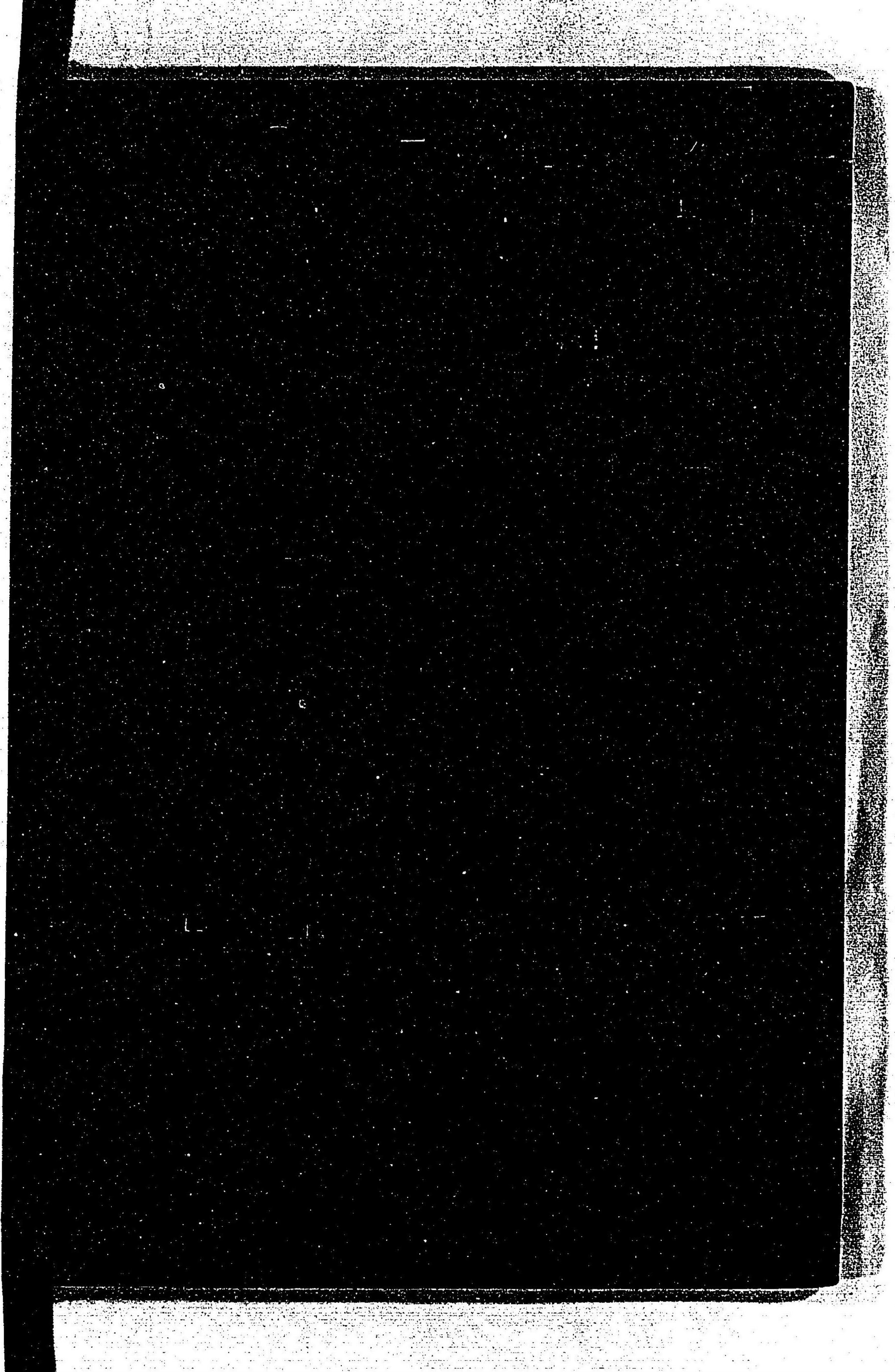
本會評議員

- | | | |
|--------------------|------|-------|
| 東京帝國大學文科大學教授 | 文學博士 | 井上哲次郎 |
| 東京帝國大學農科大學教授 | 理學博士 | 石川千代松 |
| 東京帝國大學農科大學教授 | 法學博士 | 和田垣謙三 |
| 東京高等師範學校校長 | 法學博士 | 嘉納治五郎 |
| 早稻田大學學長 | 法學博士 | 高田早苗 |
| 早稻田大學教授 | 文學博士 | 坪內雄藏 |
| 東京帝國大學文科大學教授 | 文學博士 | 上田萬年 |
| 早稻田大學教授 | 法學博士 | 浮田和民 |
| 東京帝國大學工科大學教授實業學務局長 | 工學博士 | 眞野文二 |
| 「日本及日本人」主幹 | 文學博士 | 三宅雄二 |
| 東京帝國大學文科大學教授 | 文學博士 | 元良勇次郎 |
| 本會編輯長 | 文學博士 | 浮田和民 |
| 本會編輯主任 | 文學博士 | 杉山重義 |
| 本會理事 | 文學博士 | 江藤哲藏 |
| 同 | 文學博士 | 磯部保次 |

(イロハ順)







78
98

003861-004-4

78-98

近世泰西英傑伝

第4卷

M43-44

ACE-0049



